

神経変性疾患のフレイルに対する理学療法の課題

菊地 豊¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 神経難病リハビリテーション科

Parkinson 病 (PD) に代表される多くの神経変性疾患は高齢者の罹患率が高く、症状進行による機能低下に加齢に伴う機能低下の重畳が想定される。加齢に伴う様々な機能変化や予備能力低下によって健康障害に対する脆弱性が増加した状態をフレイルと呼ぶ。フレイルは生命・機能予後に影響を及ぼす一方で、適切な介入と支援により改善可能であることから注目されている。神経変性疾患では PD においてフレイルの検討がなされており、一般高齢者に比してフレイルの罹患率が高い (Ahmed, et al. 2008) ことから、PD においてもフレイルへの対応が求められる。フレイルの予備力低下には Freid らが提唱した体重減少、疲労感、活動度の減少、身体機能の減弱、筋力低下の身体的問題 (Freid, et al. 2001) に、近年では認知機能障害やうつなどの精神・心理的問題、独居や経済的困窮などの社会的問題が含まれる。これらのフレイルによって生じる問題はパーキンソン病の特徴とオーバーラップする部分が大きく、実地臨床では鑑別が課題となる。フレイル由来の身体的問題は適度な身体運動や栄養管理など種々の介入による可逆性が示されており (Dent, et al. 2017)、進行性疾患において可逆的要素を見逃すことなく適切に介入することの意義は大きい。本発表では、一見類似してみえる PD の疾患由来で生じる問題とフレイルで生じる問題を実地臨床においてどの様に鑑別し、介入指針を立案するかについて議論を深めたい。